
コールドゲームの後で...

pasuko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コールドゲームの後で…

【Nコード】

N0867D

【作者名】

pasuko

【あらすじ】

甲子園を目指した僕たち…しかし、三回戦に第一シードで、春の大会優勝した高校に当たった…

ブローグ

また、軽快な金属音が聞こえた。

白いボールは、ライトスタンドに綺麗に弧を描き、消えた…

僕はボールが消えた彼方をずっと見る。

ホームランを打ったバッターはファールグラウンドに金属バットを転がし、悠々とダイヤモンドを回る…

「…スリーランホームランか…」

僕はロージンバックを地面に投げ捨てた。 またホームランを打たれた。

「早く終わらないかな」

それだけ頭がない…

つらい、もう投げたくない…

ロッカールーム

もう何点入れられたかわかんなかった。

それだけ相手に打たれまくったからだ…

少なくとも、10点以上はとられていたと思う…

なんせ、その試合は五回コールドが成立したからだ。

「雨宮…」

試合の後、キャッチャーの石井が僕に声をかける。

試合で負けた僕を気を使っているのか？　いつものようなラフな話し方とは違い、丁寧だった。

しかし、僕は石井にろくに返事をせず、スパイクが入った袋とクラブを乱暴にエナメルバックに入れた。

「大丈夫か？」

それでも、石井は続けた…

けど、僕はこれも返事をせずに、ロッカールームを後にした。

もし石井の問いかけに答えるとしたら、多分、大丈夫じゃないだろう。三年間一緒にバッテリーとして頑張ってきた石井の問いか

けに返事もせず、一人で苛立っていたからだ。

なんせ、今日の試合は、自分が経験した敗戦の中で、一番強烈だった。

相手が、なんせ春の甲子園出場校だ。 勿論今大会、第一シードだ。

勿論、自分たちがどんなに頑張っても、勝てなさそうな相手だ。

しかし、勝てないと信じ込むのは良くない…僕たちだって、ここまですでに試合勝って来たんだ。 なにかあるさ…

そう信じて、試合に臨んだ。

自分自身にそう言い聞かせて、マウンドに上がった。

けど、奇跡も何もなかった。

ストライクゾーンの何処に投げても、バッターは悠々とバットを振ってヒットにする。

打たれたボールは内野を抜けたり、外野に転がったり…バックスクリーンに消えたり…

味方打線のバットは空を切るばかり…

そして、五回表ツアアウト 僕のバットが空を切って、試合は終わった。

17 - 0 五回コールドだった。 順当どおりの試合だった…

皆が着替え終わると、石井はロッカールームの前の廊下に、僕たちを並ばせた。

そして、監督が来た。

「よろしくお願いします」

石井は大声で言った。 キャプテンの仕事だ。

僕たちも続く…

お決まりの挨拶だ。

「石井：キャプテンご苦労様、今までずっとひっぱてきた。 その責務をよく果たした。」

石井は涙ながら「ありがとうございます」と大声で返事した。

それから、そんなことをナイン全員に言った。 そして…

「雨宮」監督は最後に僕を呼んだ。

「はい」いままでずっと言うのを避けていたのか？と思いながら応

えた。

「我がチームのエースとしてよく頑張った…」

「はい」

「結果はどうであれ、皆ベストを尽くしたはずだ。今日は家に帰って、心身共にゆっくり休め。以上解散だ。」

結果はどうであれか… 敗戦投手の僕に対することなのかな？ そんなことを思った。 そ

頼もしい後輩（前書き）

暫く更新できなくてすみません。

頼もしい後輩

あの試合から一ヶ月が経った。

八月の半ば… 蝉時雨が注ぐグラウンドに僕はいた。

もう、後輩が秋の大会に向かって、声を張り上げて、頑張っ
て練習していた。

今日、何故か、石井に呼びつけられたのだ。

けど、呼びつけた当の本人はグラウンドにはグラウンドにいない…

「おい 呼びつけて、遅刻かよ」

グラウンドの脇の木陰に下に座って、野球部の練習を見た。

軽快な金属音が聞こえる…後輩たちが、打撃練習をしているようだ。

また、「キン」と軽快な金属音が聞こえる。

ナイスバッティング…打たれたボールは高々と上がり、グラウンドの
ネットに直撃した。

「頼もしい後輩だな？」

後ろから声が聞こえた。

「悪い…遅刻した」

石井だった。

「おいおい 呼びつけて遅刻かよ」

「いいだろ…お前、試合負けてから、ずっと顔合わせてくれなかったしな…」

「ああ…そうだったのか？」

「そうだ。引きこもってしまったかと思ったよ…試合で負けてしまったショックだよ」

「それはないな…で、なんで呼びつけたんだよ？」

「後輩の練習に付き合うのさ？ 勿論、クラブは持ってきたよな？」

「おいおい。うち等は引退した身だぜ？ キャッチボール程度かと思っただよ。」

「引退したエースの球を打つてみたいと言っからね 向うが…」

また、軽快な金属音が聞こえた。

「頼もしい後輩だな…」

「ああ…」

僕はクラブを拾い、立ち上がった。

「本当に頼もしいよ」

いつもと違うフリーバッティング

僕と石井はノッカーをしていた二年キャプテンの和久井に近づいた。

「こんにちは」

石井が言う

「こんにちは…石井先輩 雨宮先輩…」

和久井が応える。 和久井は、石井の後をついで、キャプテンになった。

すこし強情な所があるけど、真面目な性格が買われ、皆を引っ張る事になったのだ。

「今日はなぜ来たか？ 分かるよな？」

「はい…」

和久井はそう言った。

「練習終了 一年、戻って来い！！」

和久井はグラウンドに向かって、叫ぶ。 ボールを捕っていた一年生は「はい」と返事し、走って戻ってきた。

「今日はいつもと違うフリーバッティングをする。 三年生のバッテリー 雨宮先輩と石井先輩が投げてくださるそうだ。 だから、

普段のマシンとは違い実戦的なバッティング練習だ」

和久井はそういった。そして、こっちに向いて…

「お願いします 雨宮先輩 石井先輩」

「お願いします!!」

他の皆も言う。

石井は、軽く礼をして、応えた。

「順番はレギュラーからだ。以上…、練習開始」

和久井はそう言いきった。一年生の数人はグラウンドに散った。

「おいおい、俺が投げるのかよ?」

僕は、皆が散った後、石井に聞いた。

「当たり前だよ…そもそも投げるのはお前の本職だろ? 俺が投げれると思っているのか?」

石井は笑いながら言った。

「俺が投げたら、マシンだよ…いくら球が速くてもね…」

まあ、石井は強肩だけど、さすがにマウンドで投げるのはどうかと思った。

「たしかに…」

「まあ、頼むよ。後輩に胸を貸してあげな、元エース。

「わかったよ、貸してあげるよ」

「んじゃあ肩慣らしにキャッチボールでもするか？」

「もちろん…元キャプテン」と僕は返事を返した。 持ってきたグローブを左手にはめた。

それから、石井と何回か投げた。

一ヶ月もやってなかったから、捕るのが下手くそになったのだろうか？…ボールをミットの真ん中で捕れなかった。

「ん、じゃあ 座ってもいいか？」

石井は聞いてきた

「いいよ、お願い」

僕は応える。

石井はゆっくり、座った。

「よし 来い ストレート」

ど真ん中にミットを構えて、石井が大声で叫んだ。

「いくよ」

僕も石井に負けにくいぐらい、大きな声で言った。

両手を高々と、空に上げる。

背を伸ばし、左足は高く突き上げる。

突き上げた左足を、思いつ切り踏み出し、胸を開き、折りたたんだ肘を前に持ってくる。

鞭のように、肘を伸ばし、手先からボールの縫い目が抜ける。

ボールは派手な音を立てて、石井のミットに収まる。

「ナイスボール」

よかった。まだ、感覚が残っていた。

気持ちよく、ボールをリリース出来た。

なんというのか…スーと無駄な力がなく、流れるように投げれた。

あの試合から、始めて投げた一球…最高の出来だった。

いつもと違うフリーバッティング（後書き）

更新スピードが遅くてすみません。 駄文ですがよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0867d/>

コールドゲームの後で...

2010年11月12日21時29分発行